

錦織監督

映画の現場から



●●2

日本における「映画」のイメージは大きな画面で大音響で、ゆったり見られる映像コンテンツ、といったところだろうか。

地方の映画館で上映される邦画は原作コミックの映画化作品や人気タレントを主役にした映画がほとんどで、洋画もハリウッド映画が中心だ。中には大量宣伝をされていない珠玉の作品を見に行かれる映画通の方もいらっしゃると思うが、地方ではそれらの映画が見られる環境は少ない。東京ですら世界中の映画の一部が見られるにすぎない。

映画は芸術だ、などと声高に叫ぶ気などさらさらないが、映画には力があると思うている。一本の映画が人生を変えることもある。独裁者が映画によって国民を扇動したりすることさえある。フランスは国内映画が保護され、国が制作費の半分を出

「娯楽」から転換期迎える

すこともある。パリ市で撮影される映画は市が制作費の10%を負担する。韓国では上映作品の7割以上が国産映画になるように決められている。中国、インド、アメリカなども国策で映画と向き合っている。

映画監督として入国したある国で、映画監督だから盗聴されているかもしれないといわれた。それだけ映画の持つ力に敏感だ。パリの小さな映画館に行列をなす人々をみたとき、日本映画は観客にとってその力を存分に発揮しているのか、と思わず自問した。

しまねで作ったしまねの映画が全国の多くの方々に支持していただけているのは、等身大に描いた日本の古里に共感を持たれたからではないか、何げなく「日本の良さ」をスクリーンから感じ取ってくれたのではないかと感じている。

私が古里から発信していきたいと思うメッセージは、応援してください。観客が作品を重ねるたびに多くなっていることから、伝わっていると肌で感じる。

古くからの伝承が残る島根から全国に発信する映画のテーマは数え切れないと思うが、今までの価値観の転換期に日本が直面している現在、単なる娯楽でしかないと思われている映画も大きな転換期を迎えていると思う。

(錦織良成・映画監督)

第2、4金曜掲載



フランスKINOTAYO国際映画祭の「うん、何？」上映会で

あいさつする錦織良成監督(舞台右) 〓パリ市

載